2018 年度

開智国際大学「公開講座」報告

2019 年 1 月

開智国際大学

研究・図書・紀要委員会

地域貢献センター

目　　次

はじめに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　03

（1）ハワイの歴史とフラの推移　・・・・・・・・・・・・・　小山　　貴　05

（2）南インドの大きな神様と小さな神様
　　ー汎ヒンドゥー教と地域ヒンドゥー教の接合　・・・　古賀　万由里　09

（3）原文で読むドイツ文学　・・・・・・・・・・・・・・・・　阿部　雄一　11

（4）古楽と日本人演奏家の活躍　・・・・・・・・・・・・・・　飯森　豊水　13

（5）ミニテニススキルアップセミナー　・・・・・・・・・　高橋　早苗　15

（6）音楽における普遍性と独自性　・・・・・・・・・・・・　坪能　由紀子　18

（7）人工知能（AI）時代こそ人間の知恵が大切
　　～叡智融合について～　・・・・・・・・・・・・・・・・　符　儒　徳　19

（8）歌人紀貫之を形成したもの　・・・・・・・・・・・・・　服部　一枝　27

（9）中国文学に見える普遍性と独自性
　　～陶淵明の詩を中心に～　・・・・・・・・・・・・・・　三枝　秀子　37

(10) 石川淳『修羅』を読む　・・・・・・・・・・・・・・・・　佐々木　さよ　41

(11) 『星の王子さま』から開く＜智＞　・・・・・・・・・・　原田　　操　45

＜参考資料＞「2018 年度公開講座案内」　・・・・・・・・・・・・・・・・　48

はじめに

大学が担う使命の一つに地域貢献があります。公開講座はその一つで、教育研究機関としての成果を地域の方々の生涯学習にお役立ていただくことを願って、開智国際大学でも毎年、開講して参りました。おかげさまで、柏市にお住まいの方はもとより近隣にお住いの方々からも受講のお申し込みをいただき、感謝いたしております。

2018 年度は本学が教育学部と国際教養学部の２学部となって二年目となりました。小規模な大学ではありますが、こうした学部構成ゆえに本学教員の専門分野は多様です。この特徴を活かした公開講座によって地域の皆さまに「学び」を楽しんでいただきたいと考え、本年度も特集テーマ講座と一般講座の二つの枠を設けました。

特集テーマは「〈智〉を開く――普遍性と独自性」といたしました。先行きが不透明で混迷を深める時代にはポピュリズムが力を持ってくるようですが、そういうときこそ〈智〉が必要ではないでしょうか。また、偏狭な思考に陥ることなく普遍性と独自性の均衡を図ることが必要であろうと考えます。特集枠では、各講師の専門領域は異なるものの統一テーマの下に集いましたので、各分野の緩やかな連関を知的に愉しんでいただくことを願いました。また、一般講座の中には、講師が長年にわたって継続的に積み重ねてきたものがあります。

ここに、「2018 年度開智国際大学公開講座」の講座一覧とともに一部講座ではありますが内容紹介を兼ねた報告書をまとめました。地域の皆さまにご高覧いただき、ご活用いただければありがたく存じます。そして、開智国際大学をより広く深く知っていただけることを願っております。

2019 年 1 月

研究・図書・紀要委員長
佐々木 さよ

2018 年度

開智国際大学公開講座報告（1）

講座名	ハワイの歴史とフラの推移		
講　師	小山　貴	所　属	名誉教授

＜当日風景＞

＜実施概要＞

2018 年 9 月 25 日（火）　　13：00～14：30
観光地としてのハワイに詳しい人は多く、またＨＵＬＡ（日本でいうフラダンス）を楽しむ人も少なくないが、ハワイ諸島の成り立ち・ハワイ王朝の歴史・フラの起源、衰退、復興についての知識のある人は少ない。そこで今回は １．ハワイ諸島の成り立ち ２．先住民はどこからどのような航海をして来たか。 ３．ハワイ王朝の推移概略（とくにアメリカとの関係） ４．フラの起源・宣教師の圧力によるフラ禁止令・アメリカの観光開発による本来のフラの衰退。 ５．日本で一時流行した“和製ハワイアン” ６．キング牧師が提唱した自由民権運動がハワイにも影響し、ハワイ人達に［自分達の文化を守ろう］という機運が高まり、７代目の王の提唱でフラが復興し、今は新しいフラが次々に誕生していること ・・・・・等を説明し、後半は ７．ハワイ最高のフラ・コンテスト（メリーモナーク　フラ・コンテスト）２０１８年度の男女各種目の演技を投影して鑑賞した。

＜講師報告＞

当初の予想に反して２０数名が受講した。本学のいくつかの講座を受講しているという人達のほか、フラ愛好者、フラ指導者が大半を占めた。

(1) ハワイ諸島は地下のマントルの吹き出しと隆起によって海面上に姿を現したこと。一度に全島が出現したのでなく、約５１０万年前に最北端のカウアイ島が出現し、以後４３万年前にはハワイ島が出現し、予想では５００万年後にハワイ島の南東に島が出現すること。さらに現在も年間数十センチの速度で諸島全体が北西方向に移動していることを説明。

(2) ＡＤ５００年頃からポリネシア諸島の住民の一部はハワイだけでなく、ニュージーランドやイースター島などにも独特の航海術で移動を繰り返し、住み着いたことを説明。

(3) 昔のハワイの社会構造、ハワイの神話伝説、ハワイ王朝の成立、初代カメハメハ王から最後の第８代リリウオカラニ女王までの治世状況および、アメリカ白人資本家の圧力でハワイ文化は徐々に衰退し、７０年間にわたってハワイ語が禁止され、ついに１８９３年にアメリカの圧力によりハワイはアメリカに併合された経緯を説明。

(4) １９９３年、アメリカ連邦議会が「以前アメリカがハワイを併合するにあたり、先住民固有の主権を抑圧したことを認め、ハワイに謝罪する」ことが議決されたこと。

(5) フラの起源と推移・・・初期のフラとフラ暗黒時代
宣教師は「フラは聖書の精神に反する淫らな踊り」と断定し、カメハメハ３世の王妃カアフマヌをキリスト教に改宗させ、フラ禁止令を出させた。

(6) １８８３年、カラカウア王が「ハワイの文化を大切にしたい」と提唱しフラを復活させたこと。これらを説明したついでに
・数十年前、日本にハワイ音楽が紹介されたが、その後ハワイ文化とは無関係の“和製ハワイアン”が次々に出現しては消え、ハワイ音楽とフラに対する間違った認識が今も残っていることを説明した。

(7) アメリカによる女王幽閉に抗議した民衆が、抗議を示す曲を作り、それ合わせて、女王が幽閉されている近くで［抗議フラ］カウナナ　ナ　プア　を踊った動画を投影。
・・・・このような曲を知っている人は少ないため、終了後にフラ指導者が「この曲と踊りは初めて知った」と報告に来た。

(8) 現地の正式フラ指導者は男性も多く、幼少時代からフラを学び、ハワイの歴史文化にも精通している人が審査と儀式を経て指導者と認められること。

(9) 最後の３０分、メリーモナーク各種目入賞チームの演技を投影した。

●終了後、こちらからはとくに感想は求めなかったが、何人かが感想を報告した。

- アメリカ議会がハワイに謝罪する議決をしたことはまったく知らなかった。
- フラは中高年女性が踊るものと認識していたが、これは間違いと知った。
- フラ指導者女性・・景色やラブソングを生徒に教えていたが［ハワイ人よ　ハワイの伝統文化に誇りを持とう］という曲のフラがあることを知った。この曲を聞いていて涙が出た。

＜配付資料等＞

［配付資料］各種の図を含め、前項で示した内容を記したものを５枚配付
［投影画像］

1. ハワイ諸島が出現した順を示した図
2. 先住民がハワイまで到達した航海
3. 航海の目じるしにしたと推定される星座
4. クック船長が初めてハワイを訪れた当時のフラ
5. ハワイを中心とし、ハワイから等距離の太平洋全般図
6. ハワイ王朝の王８人の説明
7. アメリカの併合に抗議したフラの歌詞
8. ハワイ人民に敬愛された王族女性

9. ハワイ文化復興の機運を醸成するフラ曲
10. 筆者が所属するフラ団体がこの曲を踊った場面（筆者も参加）
11. 大会出場前、ダンサー達がキラウェア火口に祈りを捧げる場面
12. フラ指導者（クムフラ）について
13. 筆者が師事しているクムフラ
14. 最高フラコンテストの動画映像の説明
    男性カヒコ・女性カヒコ・男性アウアナ・女性アウアナ・ミスアロハフラ

2018 年度

開智国際大学公開講座報告（2）

講座名	南インドの大きな神様と小さな神様 ー汎ヒンドゥー教と地域ヒンドゥー教の接合		
講　師	古賀　万由里	所　属	国際教養学部 講師

＜当日風景＞

＜実施概要＞

2018 年 10 月 1 日（月）　　13：00〜14：30
インドで信仰されているヒンドゥー教には、全国に広がる汎ヒンドゥー教と、特定の地域に根付いている地域ヒンドゥー教がある。両者は異なる神話をもっているものの、化身や再生といった概念でつながっている。南インドのケーララ州に伝わるテイヤム儀礼を事例に、二つのヒンドゥー教の関係について示す。

＜講師報告＞

まず汎ヒンドゥー教の神々（大きな神）の特徴と、地域ヒンドゥー教の神々（小さな神）の例をあげ、地域ヒンドゥー教の神々が化身や再生といった概念によって、汎ヒンドゥー教と接合している事例を紹介した。次に、ケーララ州で行われているテイヤム儀礼の次第やカーストとの関係について述べた。また神話から、汎ヒンドゥー教の神話と地域神話が接合していることを示した。さらに、大きな神と小さな神の違いを、神の呼び名や住まい、人々の接し方や司祭のカーストから比較した。そして、地域の文化はサンスクリット文化（汎ヒンドゥー教の文化）に吸収されているのではなく、サンスクリット文化と非サンスクリット文化は融合していることを示した。最後に、報告者が撮影したテイヤム儀礼のビデオを流して現地の様子を伝えた。

受講生からは、ヒンドゥー教の寛容な性質は現代生じている宗教対立に何かヒントを与えるのではないかという意見があがった。仏教やキリスト教と異なり、創唱者や唯一経典がないヒンドゥー教は、インドの大地で様々な地域の風習と混ざりながら形成されてきたことの一例が共有できたかと思う。

2018 年度

開智国際大学公開講座報告（3）

講座名	原文で読むドイツ文学		
講　師	阿部　雄一	所　属	国際教養学部 教授

＜実施概要＞

第１回　2018 年 10 月 30 日（火）　13：00-14：30
Hermann Hesse: Der Dichter（ヘルマン・ヘッセ『詩人』）訳読（１）
第２回　2018 年 11 月 6 日（火）　13：00-14：30
同上（２）
第３回　2018 年 11 月 13 日（火）　13：00-14：30
同上（３）
第４回　2018 年 11 月 20 日（火）　13：00-14：30
Hermann Hesse: Flötentraum（ヘルマン・ヘッセ『笛の夢』）訳読

＜講師報告＞

講師報告をするのは今回が初めてだが、この講座は 2005 年からこの 2018 年まで、2006 年を除いて、毎年開講してきた。扱った作家はカフカ（2 回）、ブレヒト、クライスト（2 回）、グリルパルツァー、ハウプトマン、ビューヒナー、ヘッベル、ヘーベルとホフマン、ゲーテ、トーマス・マン、そして今回のヘッセである。毎年わずか 4 回なので、たいてい短編小説を選んでいる。

今回の受講者は 5～7 名で、ドイツ語原文を訳し合い、検討し合った。

講座はおおよそ、受講者に発音して訳してもらうことで進んでゆくが、時に、なぜこうなのか、という原因不明のことが出てきて、講師も困ったり、やむをえず宿題にさせてもらうこともある。

『詩人』という作品は、詩芸術に秀でたいと思った若者が山奥に名人を訪ねて、来たのがいつだったかも分からなくなるほど修練に歳月を重ねて名人となった、そういう人を主人公とする創作メルヘンである。これを読了したあとで、みなで感想・意見を出して話し合った。

例えばこんな質問があった。なぜ詩を学びたいのに、その前に長年、琵琶、琴、笛というぐあいに音楽をずっと学ばねばならなかったのか。この物語で語られる詩とはどのようなものか。

講師はこんなことを言った。具体的に詩の実例は出てこないが、ここですばらしいしと言われている類の詩は、自然と一体になった心境の詩で、だから（実際にはありえないことだろうが）名人が詩句を語ると、天気が変わっていくのだ。そのためには俗世の塵をすっかり洗い流して、殺されることも生きながらえることも大差ないと思えるほどの仙人にならなければならない。また、詩は言葉の意味だけのものではなく、その音（おん）もきわめて重要なので、それを自在に操る術も必要だということだろう。

ただ、講師はこれを残念な作品だと思っている。１）冒頭において、仙人のような師が、町の祭りの夜に主人公の前に現れて、詩を学びたければ私のところへ来い、私の名は自在詩仙だと言う。２）作品の終わりで、名人になった主人公が、何十年後かに故郷の祭りの夜（冒頭部の再現）にやって来て琵琶を弾くと、弾いている人を探すが見つけられずにいる人々は、誰が弾いているのか、こんな琵琶の音色は聞いたことがない、と口々に感嘆する。それに対して主人公はほほえむ。なぜ仙人が祭りの夜に人里に下りて行くのか。人々が嘆賞するのに対してなぜ主人公はほほえむのか。１）も２）も本当にこの世を達観し悟りを開いた仙人なら、するはずのない行為ではないか。ヘッセという作家は今ひとつ甘いというか、青いというか、むしろだからこそ、とっつきやすく、戦後の日本において、外国文学の中で最も読まれた作家のひとりだったのではないかと思われる。

『笛の夢』は時間が全く足りなく、あまり進まずに終わってしまった。ただし、ひとつ面白い質問があった。主人公は父親から笛を贈られ、人々に愛すべき笛を聞かせるようにと言われて、世界を知るために旅に出る。だが、歌は歌い続けるものの、最後まで笛を吹く場面がないのはなぜか、というものだった。講師は虚を突かれた。これは、1 年後までの宿題とさせていただいた。

またご縁があったら、1 年後に会いましょうということで終了した。

＜配付資料等＞

Hermann Hesse <Der Dichter>, <Flötentraum>

2018 年度

開智国際大学公開講座報告（4）

講座名	古楽と日本人演奏家の活躍		
講　師	飯森　豊水	所　属	国際教養学部 教授

＜実施概要＞

第１回　2018 年 10 月 31 日（水）　13：00～14：30
講座の導入を行った。すなわち、１）古楽という言葉、２）古楽という概念が 20 世紀になって脚光を浴びるようになった背景、３）日本人演奏家が世界の古楽演奏に大いに貢献してきたこと、４）世界でもめずらしい古楽専門誌を、1987 年以降一組の夫婦が編集・出版してきたものの、本年の夏に廃刊になったこと、５）報告者（飯森）は 2012 年から約 6 年半にわたってこの雑誌で日本人演奏家による新譜 CD 紹介を担当してきた縁があり、この機会に現在の日本人演奏家の活躍ぶりをこの講座で紹介したいと説明した。
第２回　2018 年 11 月 7 日（水）　13：00～14：30
2012 年 1・2 月合併号から 2014 年 12 月号までについて、各号で紹介した CD の演奏者、タイトル、ジャンル、内容（特徴）の一覧表を資料として配付し、これをもとに解説と関連する作品の鑑賞を行った。
第３回　2018 年 11 月 14 日（水）　13：00～14：30
2015 年 1・2 月合併号から 2018 年 8 月号「300 号記念最終刊特別号」までについて、各号で紹介した CD の演奏者、タイトル、ジャンル、内容（特徴）の一覧表を資料として配付し、これをもとに解説と関連する作品の鑑賞を行った。

＜講師報告＞

3 回の講座の構成は上記のとおりである。

これまでのように、西洋音楽史の史実にもとづくのではなく、現役の演奏家をテーマに据えた講座を行ったのには 2 つの理由があった。

ひとつは、音楽史の講座ではどうしても作曲家の現場ばかりを語り、演奏家の立場が忘れられてしまう。しかし、今回、若手を中心とする日本人演奏家たちの CD 一枚一枚を通して、そこに込められた意図や成果のみならず、彼ら・彼女たちの音楽家としての意識のありようまでを受講者の方々とともに語りたかったということがある。

もうひとつは、毎回、不自由のないスペースを与えられ、拙い演奏論や演奏家論をまとめさせていただいた筆者として、古楽専門誌「アントレ」の編集者（品川治夫・幸子ご夫妻）に対する敬意と謝意を表したいという思いであった。わが国の古楽愛好家のみならずプロの演奏家たちにも愛読されてきたこの雑誌は、音楽家たちの動向や演奏会情報、演奏の熱き現場や国内外のイベント、音楽史関連の知的実践講座などを、商業主義とは無縁の高潔かつ温もりのある姿勢で伝えていた。今年の公開講座のテーマとして、この雑誌の果たした役割を回顧したいというのは、報告者にとって自然な選択だった。

このような事情があったので、今回は、古楽とその演奏や音楽家のことなど古楽演奏（歴史的演奏実践）の現場についての具体的かつ多種多様な情報が綯い交ぜになった、やや珍しいタイプの公開講座になったことと思う。講座をお聞きいただいた受講者のみなさまにお礼を申し上げたい。

2018 年度

開智国際大学公開講座報告（5）

講座名	ミニテニススキルアップセミナー		
講　師	高橋　早苗	所　属	教育学部 准教授

＜当日風景＞

＜実施概要＞

第１回　2018 年 11 月 2 日（金）　　10：40～12：10
1. ミニテニスの概要（ミニテニス誕生の歴史的背景、競技の特徴、ルールについて） 2. デモンストレーション（長期受講者による模範試合、審判の仕方について） 3. 基本動作の修得（２人組で実技：ミニテニスの特徴と基本動作を把握） 4. コート面積を半分にしてミニゲーム（ボールの扱い方とルールを把握）
第２回　2018 年 11 月 9 日（金）　　10：40～12：10
1. 基礎練習（基本動作を修得し、ボールに慣れる） 2. コートを大きく使い、ねらったところにボールを打ち出す練習 3. サービス練習（回転をかけて対角線にサービスをする。） 4. ゲーム練習（長期受講者とペアを組んでゲームに親しむ）

＜講師報告＞

1.　参加者の特徴

今回の受講者は、男性 2 名、女性 19 名、合計 21 名であった。うち新規受講者は男性 1 名、女性 3 名、計 4 名である。なお、新規受講者には健康上の問題に配慮するため、年齢および既往症について確認した（リピーターは確認済）。そのうち男性 1 名には既往症があり、医師に運動を進められている。また、運動歴については、卓球を週 1 回程度行っているとの回答があった。新規女性 3 名については、柏市内で盛んに行われているショートテニス継続者および経験者で、既往症はなかった。

２．　講座内容

第 1 回の新規受講者の到達目標は、「ミニテニスの競技特性について理解し、ボールに慣れる」で、長期受講者の目標は、「打ち方の球種を増やし、打ちたいところへボールを出す」とした。まずはミニテニスの概要について説明後、長期受講者によるデモンストレーションゲームを行い、前後左右への切り替えが多いことや必ず 1 バウンドしたボールを打つというルールについて、更に説明を加えた。競技の特徴としては、ボールが大きくて柔らかくラケットが短いため、ラリーが続き易い。児童から年配者まで幅広い年代の方に受け入れ易い競技である。

次に、長期受講者と新規受講者に分け、基本練習を行った。新規受講者は、球出しやボールに回転を掛ける練習等の運動量が少ないものから徐々に強度を上げた。経験したことがないスポーツで緊張したためか、充分な運動量に感じたようである。また、みなラケットスポーツ経験者で

あるため、基礎練習に充分時間を掛けることで課題をクリアした。長期受講者は球慣れしており、安定感が増している。基礎技能の精度も上昇した。課題については、お互いにアドバイスをし合い、問題なくクリアしている。

第２回新規受講者到達目標は、「サービスが対角線コートに入る、ルールを理解しゲームを楽しむ」とし、長期受講者は、「６種類の打ち方を使い分け、ゲームを組み立てる」ことに主眼を置いた。新規男性は所用のため欠席であったが、新規女性３名は、サービス練習の課題を難なくクリアして長期受講者とペアを組んでのゲームを楽しむことができた。長期受講者は、６種類の打ち方について基礎練習した後に、新規受講者を交えてゲームを行った。新規・長期に関わらず和気あいあいと和やかな雰囲気の中でゲームに親しむことができ、概ね本講座は予定通りに遂行できたと考える。

3.　今後の課題

年齢制限を設けていないため、受講希望者は健康面において受講可能かどうかを主治医に相談して頂くようお願いをしている。今後は、今以上に健康上の問題に配慮し、競技特性等の詳細な情報提供と可能な範囲で受講者の既往症についての情報収集も心掛け、怪我や事故のないように細心の注意を払っていく。

＜配付資料等＞

・ミニテニス競技規則（解説付）、発行：日本ミニテニス協会

＜動画資料＞

・生涯スポーツミニテニス（初級編）、発行：日本ミニテニス協会

2018 年度

開智国際大学公開講座報告（6）

講座名	音楽における普遍性と独自性		
講　師	坪能　由紀子	所　属	教育学部 教授

＜実施概要＞

第１回　2018 年 11 月 9 日（金）　14：40～16：10
音楽における普遍性とパターン・ミュージック
第２回　2018 年 11 月 16 日（金）　14：40～16：10
アフリカをルーツとした音楽の構造とその広がり

＜講師報告＞

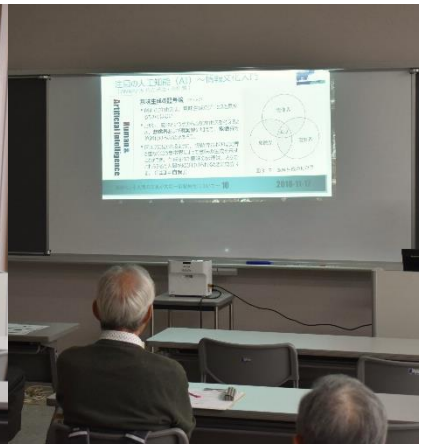
受講者の人数は少なかったですが，いずれも音楽をこよなく愛し，自分でも音楽活動をし，そして広くいろんな音楽に耳を開いた方ばかりでした。これまでのいろんな大学での大学院のゼミでもやったことがないぐらい，深い議論をたくさんさせていただきました。

2018 年度

開智国際大学公開講座報告（7）

講座名	人工知能（AI）時代こそ人間の知恵が大切 ～叡智融合について～		
講　師	符　儒徳	所　属	国際教養学部 教授

＜当日風景＞



＜実施概要＞

2018 年 11 月 17 日（土）　　13：00～14：30
洋の東西を問わず文明があります。西洋文明の究極ともいうべき人工知能(AI)の登場とともに，西洋と東洋の叡智の融合がいっそう期待されます。本講座では AI と人間の知性の意味を踏まえ，AI 時代における人間のすべきことと叡智融合の可能性について考えます。

＜講師報告＞

近年では囲碁の世界チャンピオンを破った AlphaGo の活躍により，人工知能(AI)の能力の高さが注目の的となりました。さまざまな企業が AI 事業に参画し始めるなど，ロボットや AI の話題が日々ニュースを賑わせています。AI の開発は爆発的に進化してきていますが，そのけん引役はディープラーニング（深層学習）です。ディープラーニングの特徴をひと言でいえば，コンピュータが人間のように「気づき」を得るしくみのことです。ディープラーニングによりデータを分類する手がかり（擬似特徴量）を AI 自身が見つけるということです。つまり「眼をもつ機械」が誕生。あらゆる産業に応用できると期待されています。

現在国内外では企業の昇進や採用，警察官のパトロール，画像診断などに AI 活用が広がっています。AI の技術革新で生まれる仕事もあれば消える仕事もあります。しかし，人の人生を左右しかねない技術にもかかわらず AI の判断の過程がわからない（「判断過程の不透明性」）と問題になると考えられます。そのため，日本では，AI は社会に広く影響する技術として社会的なリスクとメリットを整理する検討会が総務省や内閣府などで立ち上がっています。2016 年 10 月から総務省が「AI ネットワーク社会推進会議」を開催し，AI ネットワーク化をめぐる社会的・経済的・倫理的・法的な課題について検討しています。また，内閣府の「人間中心の AI 社会原則検討会議」で試案が示され，年内に原則案をまとめ，2019 年 1 月には欧州とのすり合わせを始めます。そして経済協力開発機構（OECD）や主要 20 カ国・地域首脳会議（G20 サミット）などの国際会合で国際協調の枠組み作りを目指しているようです。

AI の「判断過程の不透明性」のため（もちろん，そうではない AI 関連技術もあります)，「人工知能（AI）はブラックボックスだ」といわれるだけに，本格な AI が実現されつつある中で不安も増しているようです。例えば，昨年本学で行った「2045 年問題と人工知能（AI)」(2017 年 11 月 18 日）の公開講座に参加した方々に対して実施したアンケートでは，AI への期待が高まる一方で不安も大きいということが伺えます。もちろん一般市民のみならず，専門家や学者すら様々な意見や誤解をもっているようです。そこで，AI を誤解なく理解するために，まずその歴史を知る必要があります。また，AI に対する不安を解消するために，そもそも AI とは何かに関する考察が必要となります。ディープラーニングや，マシンラーニング（機械学習）と自律的判断を特徴とする AI の発展は「第 3 次 AI ブーム」ともてはやされる一方で，「判断過程の不透明性」に関わる問題で，AI の自律的判断により発生しうる社会問題などについても議論されるよ

うになってきています。

2045 年，AI が人類を滅ぼすようになると，科学者たちが警鐘を鳴らす「シンギュラリティ」があります。確かに現代の AI 技術はかなりのレベルに達しているものの，いまだにめざすべき目的でもあり避けるべき事態であり続けるのが『2001 年宇宙の旅』（1968 年公開）に登場した HAL 9000 のような存在でしょう。人間の知能を超えて加速度的に進化した AI が，人間を助けるのか，人間と対立するのか，という二項対立的な見方ばかりではなくて，人間が世界中のコンピュータネットワークと繋がって両者が融合する新たな世界もあり得ることでしょう。

AI は人間の英知が生み出した素晴らしい技術ですが，優れた技術は両刃の剣でもあります。それは人類の平和と繁栄のために役立てる手段としての技術でなければなりません。そのためには，人類の平和と繁栄を共通の目的として掲げなければなりません。AI をいいものにするのも悪いものにするのも人間次第です。賢くなった AI を人間が受け入れるにはある程度の時間が必要でしょう。また，人間をどう教育するかが改めて問われるでしょう。AI の軍事転用や，AI と人間の対立的な関係が懸念されていますがゆえに，AI を使う人類側の人格・精神性の向上がますます求められる時代となります。また，仮に，いつの日か，AI が人間から何かしらの意味で独立して活動するような日が来るとしても，そもそも人間が作る AI の性質や性格は，当然人間の性質や性格を投影したものになるはずです。そうした意味で，西洋文明の知性の究極ともいうべき AI の登場とともに，東洋の知性・叡智による調和・平和の促進がいっそう期待される時代になると思われます。

上記のことを踏まえつつ，講座はパワーポイント(PPT)を用いて行いました。
主な項目は次の通りです。

1. 人間の知性
   人間の知性には「知識・知能・智慧」という３つの分野がある。
   （１）知識：言葉・数字・記号・映像・音声などの形を取る情報
   （２）知能：知識を応用するなど様々な問題を解決する能力
   （３）智慧：AI を含めたコンピュータの土台である言葉・知識を超越する
2. 知能システム
   人間の頭脳が左脳と右脳に分かれ，その働きは２つの脳の交流作用によっている。
   （１）左脳と右脳の人工化
   （２）知能システムと異質システム統合
   （３）脳の４つの機能と４つの思考
   （４）意味生成の記号論
   （５）二つの人工知能(AI)
3. 人工知能(AI)とは
   （１）AI とは一体何なのか
   （２）AI は２つの異なる方向から研究されてきた
   （３）AI 研究の見取り図

（4）AI 歴史のまとめ

4. 人工知能(AI)は人間を超えるか

（1）ディープラーニングの特徴

（2）4 レベルの AI

（3）意識のモデル化に挑む AI

（4）特徴表現学習

5. 人間のすべきことが大きく変わる

（1）人間の仕事はどう変化していくのか

（2）身体機能から認知機能へ

（3）変化のスピードと影響力

（4）人工知能(AI)は人間の仕事を奪うのか

6. 人間に求められる能力

（1）創造力・独創性

（2）共感力

（3）推理力

7. ロボット

（1）ロボット（人工知能）のタイプ（5 種類）

（2）米国でロボットが弁護士免許取得し活動

（3）日本政府が 2015 年 1 月に「ロボット新戦略」を正式決定

（4）成長型 RPA による業務自動化領域の拡大

（5）マイクロソフトのチャットボット「Tay」の暴走

8. 人間と人工知能（AI）の共存に向けて

21 世紀の技術革新は産業革命以来の大きな変化をもたらす可能性がある。

（1）AI の進歩はコンピュータの進歩に支えられている

（2）現在の AI ブームの鍵「ディープラーニング（深層学習）」

（3）人間と AI は異質な知性

（4）AI と協調してこそ人間は進化できる

（5）大切なことは人と共生できる AI の開発

9. 人工知能（AI）倫理

（1）AI に関する各国・団体の指針など

（2）AI 倫理という観点から今後 AI に求められる要件（4 点）

（3）AI の到達点は人に愛される生命体

（4）日本人の倫理観

10. 人工知能（AI）と人間が共存する社会

（1）AI のシステムに価値観を植え付ける技術的問題

（2）AI の価値観はどういうものにするべきかとう倫理的問題

（3）日本政府が挑む超スマート社会「Society 5.0」

（4）日本主要企業の取組み

（５）演繹・帰納モデル融合による先端 AI

11. 知恵・智慧

（１）人工知能（AI）と人間の知恵

（２）コンピュータ・人工知能に智慧がない

（３）最終的な知恵・智恵の実現＝悟りの境地

（４）意識と体が直接的に感じるもの

12. 東西の叡智の融合

言葉・論理・分析の知性は左脳の機能であり，繋がり・輪の知性は右脳の機能である。

（１）分析の文明と輪の文明

（２）繋がりを理解する知性こそ 21 世紀に求められる人間の知性の進歩

（３）高度な技術力と調和・平和を兼ね備えた人類社会の形成

（４）西洋・東洋の融合と世界人類の輪

＜配付資料等＞

（講座資料の一部を配付）

公開講座　アンケート

テーマ：「人工知能（AI）時代こそ人間の知恵が大切～叡智融合について～」

2018 年 11 月 17 日（土）

性別：　　年齢：　　（代）

1. 一番印象に残った内容は何ですか。

2. この講座を受ける前と受けた後で、あなた自身がどのような変化がありましたか。

3. AI はあなた自身にどのような影響を及ぼすと思いますか。

4. 人間と AI が共存できると思いますか。

5. AI 時代における人類の叡智融合ができると思いますか。

6. 今後取り上げてほしいトピックなどのご要望はありますか。

7. 自由記述（ご意見など）

◆ご協力ありがとうございました◆

2018 年度

開智国際大学公開講座報告（8）

講座名	歌人紀貫之を形成したもの		
講　師	服部　一枝	所　属	教育学部 教授

＜実施概要＞

2018 年 11 月 26 日（月）　10：40-12：10
「やまとうたは、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける」で始まる「古今和歌集仮名序」は、貫之を後世歌道の師と仰がしめた感がある。「人はいさ心も知らずふるさとは花ぞむかしの香ににほひける」に代表される貫之の歌は「貫之集」に所収されること千余首。このように多くの歌を残した、歌人貫之を形成した要因はどこに求められるのであろうか。以下貫之の経歴をたどりつつ、貴之が歌人として生涯を生きるに至った経路について、受講生の皆様とご一緒に考えていくことにした。

＜講師報告＞

講座は

一、貫之の生年

二、貫之出生当時の紀氏

三、貫之の祖父・父・母について

四、有常文化圏との接触

と、貫之の生誕年次を推定することから始め、諸説を検討した結果、貞観十年を貫之の生年として論を進めていった。そして貫之が歌人として生涯を生きた上には、貫之の祖父・父・母の影響もあると思われるが、それ以上に有常が重要な役割を果たしていると考え、有常文化圏との接触について考察した。

有常と貫之の接触は、雅楽頭と内教坊に住む少年とのそれであった。時は貞観十七、八年、貫之十歳前後の頃である。貞観十七年以後、有常の下で業平、惟喬親王より受けた影響は少ないものではなかったと考え、有常文化圏との接触が、歌人貫之を形成した一要因と言えると結論づけた。

＜配付資料等＞

一、貫之の生年

貫之の経歴『古今和歌集目録』

延喜六年二月任越前権少掾。御書所預。同十年二月任少内記。同十三年四月任大内記。同十七年正月七日叙従五位下。同月任加賀介。同十八年二月任美濃介。延長元年六月任大監物。同七年九月任右京亮。同八年正月任土佐守。天慶三年三月任玄蕃頭。同六年正月七日叙従五位上。同八年三月任木工権頭。同九年卒。

天慶九年に卒したことに誤りないとしても、生誕年次は確かにされていない。

貫之の生年次の推定説

推定の手だてとなるものは以下の三点である。

１.「寛平の后宮の歌合」に出詠、（貫之の作品で最初に知られるものである。）

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

春の野にわかなつまんとこし物をちりかふ花に道はまどひぬ（「古今集巻二・春歌　116）

（通釈：春の野辺に若菜を摘もうと思って来たのだが、きれいな花が散り乱れているので、道に迷って終日そこで暮らしてしまった。）

吹く風と谷の水としなかりせばみ山がくれの花をみましや　（「古今集巻二・春歌　118）

（通釈：花を吹き散らす春風と、その花を里まで運ぶ谷川の水とがもしなかったならば、人の知らない深い山にひっそりと咲く花に思いを馳せることができようか。）

・この歌合の年月は明確ではない。『新撰万葉集』に採られている。
・『新撰万葉集』序に、その編纂を寛平五年九月廿五日と記している。
・新撰万葉集の成立時期以前であると考えられる。
・歌合の主催者宇多天皇の母后班子女王は、寛平四年に六十歳に達している。
・その算賀に催されたのがこの歌合であると考えられる。

２.『土佐日記』承平五（935）年正月二十一日の記事

「…かくいひつつゆくに、舟君なる人波を見て、「国よりはじめて海賊むくいせむといふなることをおもふ上に、海のまた恐ろしければ、かしらもみなしらけぬ。七十ぢ八十ぢは海にあるものなりけり」

３.「有常文化圏」との接触時期

これらを根拠に多くの学者によりさまざまな研究がされてきた。

①香川景樹　貞観四（862）年説『古今和歌集正義』

②谷 馨　貞観十四（872）年説　『和歌文学論攷』

③富士谷御杖　貞観十四（872）年説　『土佐日記燈』

④目崎徳衛　貞観十四（872）年説　人物叢書『紀貫之』

⑤萩谷朴　貞観十（868）年説　『土佐日記全注釈』

⑥西下経一　貞観十七（875）年説　『日本文学講座』紀貫之

⑦村瀬敏夫　貞観十三（871）年説　『紀貫之伝の研究』

これらの説を尊重しつつ以下のように結論づけて論を進めていくこととする。

・寛平四年頃に催されたと見られる歌合出詠の際、貫之は二十三歳にはなっていたろう。

・「ななそぢやそぢは海にあるものなりけり」という表現は、七十歳になっていない貫之の誇張表現と見るのが自然であろう。

・これらから貫之の生年は貞観十年前後ないし同十三年ごろに求めるのが妥当と思われる。

・歌人貫之を形成した一要因は「有常文化圏」との接触にあると考えたい。

・有常が雅楽頭であった貞観十七、八年の頃貫之は十歳前後にはなっていたろう。

・この推測のもと、貞観十年を貫之の生年として以下論を進める。

二、貫之出生当時の紀氏

貫之出生当時の政界　『三代実録』より主なものを挙げてみると

貞観八年閏三月十日乙卯　夜。唐天門火。延焼棲鳳翔鸞兩棲。

貞観八年閏八月十九日辛卯　勅太政大臣。摂行天下之政。

貞観八年九月廿二日甲子

大納言伴宿祢善男。右衛門佐伴宿祢中庸。同謀者紀豊城。伴秋實。伴清縄等五人。坐焼雁天門富斬。詔降死一等。並處之遠流。善男配伊豆國。中庸隠岐國。豊城安房國。秋實壹岐嶋。清縄佐渡國。相坐配流者八人。従五位上行肥後守紀朝臣夏井配土佐國。従五位下行下野守伴宿祢阿男能登國。上総國権少掾正八位上伴宿祢夏影越後國。伴冬満常陸國。紀春道上総國。伴高吉下総國。紀武城日向國。伴春範薩摩國。……

「応天門の変」＝北家藤原氏が古来の名門伴、紀氏の二氏を政界から追放するに恰好の事件。

・貞観八年（866）内裏の朝堂院真南の応天門が炎上。（朝廷内での政務・重要な儀式を行う場）

・この炎上の直後に、朝廷の混乱につけこんで大納言伴善男は、右大臣良相に対して、応天門の失火は左大臣源信（みなもとのまこと）の所為であると告げ善処を求めた。

・太政大臣良房は天皇（清和天皇）のもとに人を送って極力左大臣の無事を主張させた。良房はこのことで嵯峨源氏に恩を売りつけたのであろう。

・五か月後、備中権史生大宅鷹取（おおやけのたかとり）というものが、大納言伴善男とその男中庸らが共謀して応天門に放火したと**密告**した。

・九月廿二日、朝廷は大納言善男、中庸（なかつね）、かれらと共謀したという理由でその従者紀豊

城、伴秋実、伴清縄（きよただ）に対して応天門放火の罪をかぶせ、五人を遠流の刑に処した。
・その累は紀、伴の二氏におよび、官にあるものの八人が配流の呻にあったのである。
・その中に紀豊城の異母兄夏井も含まれていることは、三代実録の示す通りである。
・事件に直接関係のない紀夏井は、豊城の異母兄というだけの理由で遠流に処せられた。
・他の兄弟の大枝、春枝には何の咎めもなく夏井のみに罪をきせたのは、藤原氏によって仕組まれた陰謀である事は明らかである。
・この変によって、古代の名門大伴氏は完全に没落し、藤原氏にとって、“目の上の瘤”的存在であった紀夏井も政界の中心から追放された。
・**藤原良房**は事件の直後「摂政天下之政」と相なり、藤原氏は政界の頂上に立ったのである。

＊貫之が誕生したと思われる貞観十年（868）頃、夏井は土佐に流され、野心家名虎の遺志を継いだ有常も、惟喬親王が立坊争いに敗れた後は政治的野心も失せ、斉衡二年正月七日に従五位上に叙せられてから、正五位下となる貞観十五年正月七日まで何と十八年もの年月を費している。清和朝における有常の不遇の程が窺われる。夏井が遠流に処せられたこのころが、紀氏一門の最も零落していた時期と思われる。

三、貫之の祖父・父・母について

貫之の祖父　本道

・天安元（857）年　従五位下
・貞観三（861）年　八月廿一日、筑前権守
・貞観四（862）年　二月筑前守
・貞観八（866）年十一月二十九日下野守（三代実録）。
・これ以後の記事の見当たらないところから察するに、間もなく没したのであろう。

貫之の父　望行

・祖父の本道よりも現存する記事は少なく、三代実録には何も書かれていない。
『古今和歌集目録』にも、
紀茂行一首哀、承和比人。官史云々
とあるだけで、勅撰作者部類より六位でおわったらしいこと位しか詳しい官歴はわからない。
・貫之に父に関する歌が残されていないのは、望行が貫之の成人を待つことなく没したためか。
・その生年は明白ではないが、父本道が下野守として下向する貞観八年（866）に同行していないところをみると、その時は二十一歳以上になっていたろう。
・この事実より村瀬敏夫氏は、望行の生年を承和十年（843）と仮定された。
・望行の父本道も、兄友朋も従五位下まで昇っているのに、望行は六位で終わっている。
・早世であったことを思わせるが、貫之が大学に入学する元慶五、六年（881、2）頃までは生存していたと思われる。
・生存のうちに、望行が貫之に及ぼした影響は数少ない。しかし、望行も和歌を詠む人であったので、

大歌人たる素養は父から譲り受けたものと想像される。

貫之の母

・「紀氏系図」には生母の名は記されていないが、貫之の童名から、内教坊の伎女なる人であったと推劇できる。
・『続群書類従』の紀氏系図によると、貫之の傍注に「童名号内教坊阿古久曽」とある。
・清輔本『古今集』の巻一・二番の歌の脚注に「童名号内教坊阿古久曽」とある。
・貫之が幼年の頃「内教坊の阿古久曽（ないきょうぼうのあこくそ)」と呼ばれていた事を知ることができる。
・目崎徳衛氏の論（人物叢書）貫之の母は内教坊の女性であるという興味深い見解が示された。
「貫之の童名に内教坊の文字が冠せられたのは、彼の母が内教坊に房を持つ伎女か倡女で貫之はこの女に通った望行との間に生まれ、内教坊の中で育ったためではあるまいかと推測するのである。」
「私は貫之が貴族社会の粋筋に当たる教坊の内に生を受け、多くの歌姫、踊子たちから『阿古久曽、阿古久曽』とマスコット的に可愛がられて育ったと考える方が、後年王朝文化を和風女性風に転換する立役者となった彼にふさわしいと思うのだがどうだろう。しかし何分にも確たる史料を欠くので一つの文学的仮設としてしか私見を提示できないのは大変残念と言わねばならない。」

【内教坊】

・女楽、踏歌をつかさどるところで、唐制にならって少なくとも奈良時代の初めから宮廷の一角に設置されていた（官職要解)。「伎女」あるいは「倡女」がいて、伎女等は坊町に房を与えられて住み、宮廷の宴会や外客の歓待など、いろいろな機会に音楽や舞踊を演じ、また貴族の子女のために出張教授などもした。
・官史として宮中にあった望行が、内教坊の伎女と知り合う可能性は十分考えられ、目崎氏の仮説は誰もがいうべくしていい得なかった妥当性の高い憶測といえよう。
・この母の没年時を知る術はまったくないが、貫之が生母を詠んだ歌を残さないことから、やはり早世したと考えられる。
・貫之はこのような人を母に持ち、内教坊で「阿古久曽」と可愛がられて幼年時代を過ごした。・・
・貫之の歌人としての要素が、内教坊という華やかな雰囲気によってもたらされたと見る説に賛同はするが

貫之が歌人として生涯を生きた上には、有常が重要な役割を果たしていると考える。

・有常と貫之の接触は、雅楽頭と内教坊に住む少年とのそれであった。
・貞観十七、八年、貫之十歳前後の頃である。

四、有常文化圏との接触

文徳天皇の第一皇子惟喬親王と「有常文化圏」

・藤原良房の女明子の生んだ惟仁親王との立坊争いに破れ失意の生涯を余儀なくされたことは周知の事実である。
・文徳天皇崩御の年、天安二年（858）より一四年の後、惟喬親王は二十九歳の若さで出家。
・親王の在俗時代から、親王の伯父にあたる有常、有常の娘婿の業平らを中心とするひとつの独自

の世界が形成されていたと考えられる。

・今このグループを便宜上「有常文化圏」と呼び、グループの貫之への影響について考察してみたい。

『伊勢物語』八十二段（惟喬親王在俗時の話が描かれている）

昔、惟喬の親王と申す親王おはしましけり。山崎のあなたに、水無瀬という所に宮ありけり。年毎の桜の花盛りには、その宮へなむおはしましける。その時、右の馬頭なりける人を、常に率ておはしましけり。時世経て久しくなりにければ、その人の名忘れにけり。狩は懇ろにもせで、酒をのみ飲みつつやまと歌にかかれりけり。今狩する交野の渚の家、その院の桜、殊におもしろし。その木の下に下り居て、枝を折りてかざしに挿して、上中下皆歌詠みけり。馬頭なりける人の詠める。

世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし

となむ詠みたりける。又、人の歌、

散ればこそいとど桜は愛でたけれうき世に何か久しかるべき

とて、その木の下は立ちて帰るに、日暮になりぬ。御供なる人、酒を持たせて野より出で来たり。「この酒を飲みてむ」とて、よき所を求め行くに、天の河といふ所に至りぬ。親王に、馬頭大御酒まゐる。親王ののたまひける、

「交野を狩りて天の河のほとりに到るを題にて、歌詠みて盃はさせ」とのたまうければ、かの馬頭詠みて奉りける。

狩り暮らし棚機女に宿からむ天の河原に我は来にけり

親王、歌をかへすがへす誦し給うて、返しえしたまはず。紀有常、御供に仕うまつれり。それが返し、

一年に一度び来ます君待てば宿かす人もあらじとぞ思ふ

帰りて宮に入らせ給ひぬ。夜更くるまで酒飲み、物語して、主人の親王、酔ひて入り給ひなむとす。

十一日の月も隠れなむとすれば、かの馬頭の詠める。

飽かなくにまだきも月の隠るるか山の端逃げて入れずもあらなむ

親王に代り奉りて、紀有常、

おしなべて峰も平になりななむ山の端無くば月も入らじを

伊勢物語の作者の惟喬親王への思い

・藤原氏専横時代の初期にその犠牲にさせられた惟喬親王について、力をこめて描いている。

・「水無瀬の宮への桜狩」について、「年毎の桜の花盛りには、その宮へなむおはしましける。」と書いて、八十二段も恒例の行事の如き言い方をしているのであるが、

・次の八十三段に「こういう桜狩のあった翌年に突然出家した」と描き、親王が最後の桜狩を覚悟されていたこと、親王にお供をした業平や有常も秘かに親王出家を感じていたことを言外にほのめかしている。

・史実的に考察するならば、この場面の年代は、業平が右馬権頭であった貞観七年（865）から、惟

喬親王が出家する同十四年（872）七月十一日の間と考えられる。
・本文中に「狩は懇ろにもせで酒をのみ飲みつつ、やまと歌にかかれりけり」と描くことにより、皇位継承に破れた親王と、親王の支援者の第一人者である有常、業平らが酒を飲み歌を詠みして、お互いに慰め合っていた様子を事実によって現わしているように思われる。
・業平の「あかなくに」の歌、有常の「をしなべて」の歌で「山の端がなければ月も入らなかろうものを」と詠んでいるのは、単に酒席を去ろうとする親王を月として詠んだのではなく、世を逃れようとする親王を月に、そして藤原氏の圧力を山の端として詠んでいる。
・失意のどん底にいる惟喬親王、有常、業平のもつ共通した感慨、言わずして相通ずる憐の心を持っての桜狩の場面が実に哀に描かれている一段である。
・親王を中心とするこのグループは「うき世のすさび」から生まれたものと思われる。

藤原敏行

・有常文化圏を形成する有力人物として、藤原敏行があげられる。
・彼は北家藤原氏によって政治の中心から追い払われた南家藤原氏の系統。
・陸奥出羽の按察使富士麿を父に、紀名虎の女を母とし有常の女を妻としている。
・すなわち、有常とは伯甥、舅婿という親密な関係である。
・業平の妻が有常の女であることより、業平とも縁のある人である。

古今巻十三、恋歌三

なりひらの朝臣の家に侍りける女のもとによみてつかはしける
としゆきの朝臣
つれづれのながめにまさるなみだ川袖のみぬれてあふよしもなし　（617）
かの女にかはりて返しによめる
なりひらの朝臣
あさみこそ袖はひづらめ涙河身さへながるときかばたのまん　（618）

古今巻十四、恋歌四

藤原敏行朝臣のなりひらの朝臣の家なりける女をあひとりて、ひみつかはせりけることばに、いままうでく、雨にふりけるをなむわづらひ侍るといへかるをききて、かの女にかはりてよめける
在原業平朝臣
かずかずにおもひおもはずとひがたみ身をしる雨はふりぞまされる。　（705）
と、業平と敏行の贈答歌がみえる。
「なりひら朝臣の家に侍りける女」とは、業平の妻の妹を指すのであろう。

紀有朋と惟喬親王

貫之の伯父、すなわち友則の父である有朋もこのグループの一員であったと考えられる。
古今和歌集巻十六、哀傷歌に
これたかのみこの、ちちの侍りけん時によめりけんうたどもとこひければかきておくりけ

るおくによみてかけりける

ことならば事のはさへもきえななむみれば涙のたぎまさりけり　　(854)

・惟喬親王が有朋の死後その遺作集を書いて奉ることを命じていることから証明できる。
・有朋がグループの一員であったとすればその弟、つまり貫之の父望行も歌詠みであったらしいので、一員に加わっていたであろう。

貫之が有常と接触したのは、有常が雅楽頭であった貞観十七、八年の頃であろう

・貫之の八歳位の時である。
・当然のことながら、有常文化圏との接触もこの頃の事である。
・少年時代の貫之は、業平、敏行、有常という当代一流の歌人が形成していたグループに囲まれて育ったのである。

貫之と小野

古今和歌集巻五、秋歌下に

をのといふ所にすみ侍りける時もみぢをみてよめる

つらゆき

秋の山もみぢをぬさとたむくればすむわれさへぞたび心ちする　　(299)

という歌がある。

・貫之は若い頃小野に住んだ事が知られる。
・寛平九年（897）惟喬親王は五十四歳で世を去っている。
・貫之の三十歳位の時である。
・あるいは、小野の地で惟喬親王と貫之の出会いがあったかも知れない。

貫之と交野の渚の院

土佐日記承平五年二月九日の条に、土佐から帰京する途中、舟から親王と業平の遊んだ交野の渚の院をみて

その院、むかしをおもいやりてみればおもしろかりけるところなり。しりへなるをかには、まつのきどもあり、なかのにはにはむめのはなさけり。ここに、ひとびとのいはく、これ、むかしなだかくきこえたるところなり。故これたかのみこのおほむともに、故ありはらのなりひらの中将のよのなかにたえてさくらのさかざらばはるのこころはのどけからまし

といふうたよめるところなりけり（日本古典文学大系『土佐日記』）

と書かれている。

・これは『伊勢物語』八十二段にみえる物語から受け入れたものである。
・この光景を史実的に考証すると、貞観七年（865）から貞観十四年（872）の間の事で、貫之の一歳から五歳の間の事となる。
・貫之は実際に桜狩の場に居合わせたわけではないであろうが、実に感慨深げに書いている。

・有常から聞いたのであろうか。
・惟喬親王、業平から直接話を聞く事もできたとも思われる。
・貞観十七年以後、有常の下で業平、惟喬親王より受けた影響は少ないものではなかったとみえる。
・有常文化圏との接触は、歌人貫之を形成した一要因と言える。

2018 年度

開智国際大学公開講座報告（9）

講座名	中国文学に見える普遍性と独自性 ～陶淵明の詩を中心に～		
講　師	三枝　秀子	所　属	教育学部 准教授

＜当日風景＞

＜実施概要＞

2018 年 11 月 28 日（水）　　13：00-14：30
中国文学は悠久の歴史を有します。その中国文学の特に漢詩に見える普遍性とは何でしょうか。講座では、日本でも馴染みの陶淵明の詩を取り上げ、中国文学の普遍性とは何か、そして陶淵明の独自性は何か、受講者の皆様と一緒に探りたいと思います。

＜講師報告＞

2018 年度の公開講座のテーマは「普遍性と独自性」である。よって、中国の文学における「普遍性と独自性」について、陶淵明の詩を中心に取り上げることにした。

講座は以下の目次に従い行った。

１、普遍性と独自性

２、中国について

３、陶淵明について

４、陶淵明の詩文に見える「普遍性と独自性」

以下、各項目の内容を、簡略に記すことにする。

１、普遍性と独自性

当該講座での「普遍性と独自性」についての考え方を定義した。

①中国の歴史全体を貫通する「普遍性」

②中国のある時代の中での「普遍性」と、その中で異彩を放つ「独自性」

２、中国について

前述の①②を理解するため、中国の歴史を説明した。とりわけ陶淵明の生きた時代の歴史について詳細な説明をした。

３、陶淵明について

陶淵明詩の理解の一助として、陶淵明の出自を説明した。

この時代、「六朝時代」と呼ばれる貴族文化の華やぐ時代であった。陶淵明は貴族階層ではない「寒門」所謂、士大夫階層の出身であったため、当時の貴族文化の中では異色を放つことになる。貴族社会を「普遍性」とするならば、陶淵明の属する士大夫層は「独自性」として捉えることができる。

４，陶淵明の詩文に見える「普遍性と独自性」

陶淵明と同時代の貴族出身である王羲之及び謝霊運の作品と、陶淵明の作品とを比較し、上記①②に関する「普遍性と独自性」を探った。

2018 年度

開智国際大学公開講座報告（10）

講座名	石川淳『修羅』を読む		
講　師	佐々木　さよ	所　属	教育学部　教授

＜実施概要＞

2018 年 11 月 30 日（金）　13：30～15：00
「正史」が勝者の手によるものという考え方には賛同者が多いようです。応仁の乱を背景に盗賊の首領となって独自な生き方を探る姫君の姿は普遍性に通じるように思います。彼女ら一党の主張を通して「普遍性」や「正しさ」を文学的に問うてみる機会になればと考えています。

＜講師報告＞

① 石川淳（明治 32(1899)年 3 月 7 日～昭和 62（1987)年 12 月 29 日（88 歳）の年譜的事項を紹介。また、「普賢」「マルスの歌」などに触れたのちに、戦中の「江戸留学」についてと戦後文学史上での位置づけについて概説を行った。

② 『修羅』の時代的背景をまとめるために、配付資料⑥を用いて応仁の乱の山名氏と細川氏との東西両陣について確認を行った。

③ 『修羅』を読む

（1）第 1 章と第 2 章本文を配付資料②によって読み、主人公胡摩と一休宗純との出会い、胡摩が一休に語る誕生時の逸話、一休の教えなどの整理を梗概で辿りつつ行った。また、本文冒頭部で描かれる足軽に関連して、資料⑤を用いて解説した。加茂川の岸に積み重なる死骸の中から新たに生まれ出て、山名の姫としての生を捨てて新たな己を生きる胡摩のその後に深くかかわることであり、古市党を率いる胡摩によって描かれる歴史観に関連する面があることな

どにふれ、『修羅』における、足軽によって描かれる歴史観と胡摩によって描かれる歴史観の確認を行った。その後、配付本文資料を参照しつつ梗概を辿ることで古市党を率いるに至るまでの整理を行った。

（２）一条兼良（応永９（1402）年～文明 13（1481）年）の年譜的事項の紹介を行った。80 歳で没するまでのうち、応仁の乱（応仁元（1467）年 9 月～文明 9（ 1477）年 11 月）で、邸と書庫「桃華房文庫」を焼失したこと、応仁２年に子の尋尊（興福寺大乗院門跡）を頼って奈良へ疎開したこと、奈良で『花鳥余情』（30 巻）を完成したのが 71 歳であったこと、などを紹介した。

（３）「桃華房文庫」焼失について概説した。史実では応仁元年 9 月 18 日（新暦では 10 月 25 日）に赤松勢の攻撃にあって全焼したこと、質量ともに、「金沢文庫」の数倍とされたが所蔵文献のほとんどを失ったこと、一部は奈良に移していたため焼失を逃れたこと、などを概説した。また、「陽明文庫」「金沢文庫」の簡単な解説を行った。

（４）一条邸と「桃華房文庫」の所在地をパワー・ポイントのスライドによって確認した。

（５）配付資料②によって、胡摩と古市党が「古市ものの血筋を賭け」て「桃華房文庫」を襲撃する理由を確認した。胡摩が一党に言い渡した言葉である「旧記とは何をいふぞ」「史を書かば、まさに今より書け。」「公卿の手にとどめるな。また足軽の手にもわたすな。こころあって、これをほろぼすものは、わが一党のほかにはないぞ。」の意味を考察した。同じく「桃華房文庫」を狙う者たちについても確認を行った。

（６）配付資料③によって、石川淳における「革命」幻想について概説し、『修羅』における応仁の乱による荒廃と敗戦後の荒廃とをつなげた。特に、よく引用される箇所である以下を用いた。「もし、この国に無血革命といふものがおこなはれうるとすれば、負けいくさはけだし千載一遇の絶好のチャンスであつた。」、「負けいくさといふは現実は歴史上決してあめえものではなかつた」、この現実を「人民の生活にとつて幸運であるやうな方向に切替へて、あめえ思想に筋金を入れることができない相談ではなかつたはずである。」などである。すなわち、敗戦が「この国の人民」にとって「歴史にとつて」、どのような意味を持ちうるのかを問うということである。昭和 33 年の『修羅』で描かれた応仁の乱と胡摩の言う歴史観とその実践的生き方には、昭和 27 年に発表された「革命とは何か」の反映がある。

④　公開講座特集テーマ「普遍性と独自性」と『修羅』

歴史を記述するという行為は人間にとって普遍性をもつといってよいだろうが、記述された歴史が、誰の手によりいかなる視点によるのかとなると普遍性の範囲が揺らいで来よう。ある見方や立場にとっては普遍的であるものでも、別の見方や立場からすると普遍的であるとは言えないかもしれない。

配付資料④にあげた呉座勇一氏の著書が広く話題になって、テレビ番組等で紹介されたりしたことが記憶に新しいこともあり、応仁の乱を舞台にした『修羅』を取り上げることで受講者の方々が歴史における普遍性について考えていただく一助になればと考えたことが講座の開講となった。普遍性の対極には独自性もしくは特異性特殊性があり、歴史におけるそれは何かを問うことにつながるであろうとも考えた。何より、講師自身が考えたいことでもあった。講師のわがままにお付き合いくださった受講生の皆様に深く感謝申し上げたい。

＜配付資料等＞

①『修羅』初出：昭和 33 年 7 月（「中央公論」第 73 巻第 7 号）

②使用テキスト：『石川淳選集第 5 巻』（1980 年 3 月　岩波書店）所収『修羅』

配付本文部分：pp. 214-237　pp. 240-249　pp. 264-265　pp. 272-277　pp. 282-287

③石川淳「革命とは何か」（昭和 27 年 8 月「文学界」）

配付本文部分：『石川淳選集第 13 巻』所収『夷斎俚言』より pp. 322-325

④呉座勇一『応仁の乱』（2016 年 10 月　中央公論新社）より pp. 109-112　pp. 144-149

⑤「細川氏略系図」「山名氏略系図」「足利氏略系図」「一条家略系図」「東西両軍の主な大名」（④に同じ）

⑥「衆徒・国民と城郭の分布」（「奈良市埋蔵文化財調査センター「平成 27 年度秋季特別展　近世奈良の開幕」会期：平成 27 年 10 月 16 日～平成 27 年 12 月 28 日」パンフレット p. 2

⑦青柳達雄「石川淳『修羅』の構造」（「日本文学」第 25 巻第 7 号　1976 年 7 月）pp. 18-19

2018 年度

開智国際大学公開講座報告（11）

講座名	『星の王子さま』から開く＜智＞		
講　師	原田　操	所　属	教育学部　教授

＜実施概要＞

2018 年 12 月 14 日（金）　　16：20～17：50
『星の王子さま』という作品を、その成立状況や著者の経歴等から再考し、様々な読み方によって、この作品から＜智＞を開く経験を提案する。

＜講師報告＞

アントワーヌ・ド＝サンテグジュペリ作『星の王子さま』は、世界的ベストセラーであり、作者の母国フランスでは、2004 年に行われた「生涯にわたる影響を受けた書」を尋ねるアンケート[1]において 3 位に入った（ちなみに 1 位は聖書、2 位はヴィクトル・ユゴーの『レ・ミゼラブル』である）。本邦においても、永きにわたって内藤濯氏訳の岩波書店版で親しまれてきたが、2005 年に著作権の保護期間が満了し、新訳の出版ラッシュが起きた。覚えておられる方も多いだろう。

本作品はまた、現在まで度々教科書に採用されてきた、いわば「鉄板」の「児童文学」作品である。最も有名な「キツネ」と王子さまの対話の部分では、絆の大切さが説かれ、このメッセージによってだけでも、今後も広く読まれ続け、特に若い読者のこころの指針となる文学作品として機能し続けることが予想される。

本講座では、そのような読まれ方を、様々なかたちで広げようという試みである。なぜならこの作品は、最初の印象を良い意味で裏切るような、複雑なメッセージを担っていると考えられるからであり、その点ではむしろ、「児童文学」というジャンルには馴染まないかもしれない。多様な読み方が可能だからこそ、時間や空間の拡がりを超えた不動の人気を得ているのではないか。読み続けられる作品に固有の厚みが『星の王子さま』という小冊子にはあり、それを追究してみ

[1] Enquête Sofres pour la SNCF et *Lire*, dans le cadre de « Lire en fête ».

ようと考えた。

飛行家兼作家という二足の草鞋を履くことを選んだ作者の波乱万丈の経歴、アメリカで書かれ出版されるという作品の特徴的な成立過程、『星の王子さま』にまつわるすべてが、20 世紀初頭から第二次世界大戦に至る時代の歴史的背景や文化・社会情勢等の変化と密接に結びついている。このことを、色々に視点を設定しながら、近年の研究書を参照しながら、受講生の方と考えてみた。

最後に受講生の方それぞれに、『星の王子さま』体験を伺った。子供の頃に読んだため、良く覚えていないという方もいらしたが、講師自身が子供時代に初めて読んだときには、何か釈然としない読後感しかなかったと明かしたところ、自分も実はそうであったと共感して下さる方も居た。

この講座のあと、再び本書を手に取り読み返して下さり、また講座によって新しい読み方を発見される受講生の方がいらっしゃれば、講師として真に幸いに思う。

パロディを含め、映画やマンガなどによる翻案も数多く出版され、星の王子さまのイメージの更新に一役買っている。

左は、Gallimard 社、Folio Junior 版の作者による表紙。

下は、Joann SFAR（Gallimard 社、2008 年）によるバンド・デシネ（＝マンガ）版。

＜配付資料等＞

講座ではパワーポイントを使用した。スライドの抜粋をプリントし、資料として配付した。

柏市教育委員会
後援

開智国際大学 公開講座

〈智〉を開く ～普遍性と独自性～

開智国際大学では毎年、一般の方に向けて公開講座を開講しています。語学、文学、芸術学など様々な分野の学問について、それらを専門に研究する大学教員がわかりやすく解説します。今年の公開講座のテーマは、大学名の「開智」にちなみ、「<智>を開く ～普遍性と独自性～」。「智」という言葉には「物事を理解する能力」という意味があります。「理解する」ことは、自分の知らない物事に興味・関心を持ち、学ぼうとすることから始まります。その姿勢は、多様化する社会を生きるうえでますます重要なものとなっていくでしょう。この秋、開智国際大学であなたの<智>を開く体験をしてみませんか。

期 間 2018年9月25日（火）～12月14日（金）

会 場 開智国際大学 〒277-0005 柏市柏1225-6 TEL: 04-7167-8655

●アクセス

【徒歩】 柏駅東口から約20分

【バス利用】
柏駅東口「戸張」行バス（4番のりば）から乗車約10分、「柏学園前」下車徒歩3分

※駐車スペースがありませんので、ご来場にあたってはお車はご遠慮ください。

お申込方法
メール、ハガキ、FAXのいずれかで、次の事項をご記入の上、以下の宛先へお送りください。
①氏名 ②住所 ③電話番号 ④希望講座名

開智国際大学 公開講座係 〒277-0005 柏市柏1225-6 FAX: 04-7163-0096 MAIL: soumu@kaichi.ac.jp

●講座一覧

受講料：各回1,000円

日　時	講座名 / 講師	内　容
9/25(火) 13:00～14:30	**ハワイの歴史とフラの推移** ■小山 貴 名誉教授	ハワイ諸島の成り立ち・先住民はどこから来たか・ハワイ王朝の歴史およびフラの起源と推移を説明します。ハワイでは［フラダンス］ではなく［HULA（踊り）］といいます。講義後半はハワイ最高のフラ演技を画像で紹介します。
10/1(月) 13:00～14:30	**南インドの大きな神様と小さな神様** ■古賀 万由里 講師	ヒンドゥー教には全国で祀られている共通の神様と、特定の地域でしか祀られていない神様がいます。南インド・ケーララ州のテイヤム儀礼を事例に、家族や化身という概念により結びつけられる両神のダイナミズムと信仰についてお話します。
10/3(水) 13:00～14:30	**大人のための楽しい国語教室** ■遠藤 真司 准教授	言葉を正しく理解し、適切に使っていくことは、私たちの生活を豊かなものにします。「話すこと・聞くこと」のコミュニケーション力を中心として、“言葉って楽しい”と思える学びにしていきます。
10/30, 11/6, 11/13, 20(火) 13:00～14:30	**原文で読むドイツ文学** ■阿部 雄一 教授	ドイツ語の初級文法をおおよそ修得している方を対象とし、毎回訳していただきます。今回はHermann Hesse《Der Dichter》《Flötentraum》の２編を読みます。申し込まれた方には、原文テキストを９月10日以降に送付いたしますので、予習をお願いします。（※定員10名）
10/31, 11/7, 14(水) 13:00～14:30	**古楽と日本人演奏家** ■飯森 豊水 教授	バッハの活躍したバロック時代までの音楽を一般に「古楽」と呼びます。この領域での日本人演奏家、特に中堅若手の活躍は目覚ましいものがあります。古楽専門誌「アントレ」で７年にわたり日本人演奏家のCDを紹介した経験から、その内容を概観します。
11/2, 9(金) 10:40～12:10	**ミニテニススキルアップセミナー** ■高橋 早苗 准教授	ミニテニスは大きめのボールと短いラケットを使い、バドミントンコート内でダブルスゲームを楽しむスポーツです。対象年齢は、小学校高学年～最高齢89歳の方まで、幅広い年齢層の方に親しまれています。レベルが合えば、15分程度の練習で試合ができます。（※定員20名）
11/2, 9(金) 13:00～14:30	**楽楽個人記を書こう** ■得丸 智子 教授	自分のために楽しく文章を書きませんか。誰かに読んでもらうためではなく、自分を読者として書けば、楽な気持ちでペンが動きます。簡単に短い文が書ける方法を紹介します。日常生活でのちょっとした気づきや、忘れがたい思い出など、自由に書いてみましょう。（※定員10名）
11/9, 16(金) 14:40～16:10	**音楽における普遍性と独自性** ■坪能 由紀子 教授	世界の音楽には独自の魅力がある一方、太鼓のように普遍的に使われている楽器もあります。実際に楽器に触れたり動画を見たりしながら、体験を交えてその両者を実感していきます。
11/17(土) 13:00～14:30	**人工知能（AI）時代こそ人間の知恵が大切** ■符 儒徳 教授	洋の東西を問わず文明があります。西洋文明の究極ともいうべき人工知能(AI)の登場とともに、西洋と東洋の叡智の融合がいっそう期待されます。本講座ではAIと人間の知性の意味を踏まえ、AI時代における人間のすべきことと叡智融合の可能性について考えます。
11/24(土) 13:00～14:30	**智を開く“学校の働き方改革”とポジティブな学校文化** ■八尾坂 修 教授	学校における働き方改革について緊急提言（2017年8月29日）が出されるほど、教師が授業や授業準備等に集中し、健康でいきいきとやりがいと誇りをもって勤務でき、教育の質を高められる環境の整備が喫緊の課題となっています。多忙化対応策・ポジティブな学校文化について考えます。
11/26(月) 10:40～12:10	**歌人紀貫之を形成したもの** ■服部 一枝 教授	「人はいさ心も知らずふるさとは花ぞ昔の香ににほひける」に代表される貫之の歌は「貫之集」に所収されること千余首。多くの歌を残した歌人貫之を形成した要因を、貫之の経歴をたどりつつ、貫之が歌人として生涯を生きるに至った経路について考察します。（※定員20名）
11/28(水) 13:00～14:30	**中国文学に見える普遍性と独自性～陶淵明の詩を中心に～** ■三枝 秀子 准教授	中国文学は悠久の歴史を有します。その中国文学の特に漢詩に見える普遍性とは何でしょうか？講座では、日本でも馴染みの陶淵明の詩を取り上げ、中国文学の普遍性とは何か、そして陶淵明の独自性は何か、受講者の皆様と一緒に探りたいと思います。
11/30(金) 13:30～15:00	**石川淳『修羅』を読む** ■佐々木 さよ 教授	「正史」が勝者の手によるものという考え方には賛同者が多いようです。応仁の乱を背景に盗賊の首領となって独自な生き方を探る姫君の姿は普遍性に通じるように思います。彼女ら一党の主張を通して「普遍性」や「正しさ」を文学的に問うてみる機会になればと考えています。（※定員20名）
12/14(金) 16:20～17:50	**『星の王子さま』から開く＜智＞** ■原田 操 教授	アントワーヌ・ド・サンテグジュペリ作『星の王子さま』は、多くの国で読まれる名作ですが、その成立に独特の事情があることをご存知ですか。本講座では、最近の『星の王子さま』観を紹介し、作品が隠し持つ豊かな＜智＞を繙いてみたいと思います。（※定員20名）

※申込みをされた方には、開講日の10日前を目安にご案内をお送りします。都合により開講を見送る場合には、その旨ご連絡いたします。 ※過去3年以内に本学の公開講座を受講された方は、受講料の半額が免除されます。

2018年度 開智国際大学「公開講座」報告

編集 開智国際大学 研究・図書・紀要委員会
地域貢献センター
発行 開智国際大学 〒277-0005 柏市柏 1225-6
Tel 04-7167-8655 Fax 04-7163-0096

KAICHI INTERNATIONAL UNIVERSITY